漢字は零歳から覚えられる

生後八か月という赤ちゃんは、アーアーとか、ウーウーとか、まだ言葉にならない音声を発しているのが普通です。そんな時期に、漢字をどんな方法で教えたところで、それを受け入れて覚えるはずがない。そんな時期に、毎日漢字を覚えていったという雄鎔君は、超人的な存在であって、一般にはとても考えられないことだ。……あなたはきっとそう思われるに違いありません。

ところで、生後八か月という時期は、母親の言葉を聞くと、それを模倣して言ってみようと努力し始める時期なのです。母親の言った通りに言ってみようとして言い、その言ったものを自分の耳で聞いて確かめ、自分の発音を母親の発音に近づける努力を始める時期です。

こうして幼児は言葉を覚えていくのですが、それからわずか三、四年の間に、およそ二千の言葉を覚え、それを文法的にも正しく使えるほど、母国語を身に付けることに成功するのです。この“言葉の学習’”とは、だれもが当たり前のこととして経験しており成功しているので、やさしいことだと思っていますが、実は大変な仕事なのです。それに比べたら“漢字の学習”など実にやさしいことなのです。

雄鎔君が来日して、テレビに出演して人々を驚かしたそのころ、「一歳半の坊やが三百字の漢字を読む」ということでマスコミの話題になった田中庸介君が、漢字に初めて関心を示したのは、やはり生後八か月のころでした。

また、沖縄で石井方式漢字教育の普及に努めてくれています又吉信一氏が、長男の孝旨君に漢字を教え始めたのが、やはり生後八か月の時でした。孝旨君は、それから半年の間に、二百字の漢字を覚えました。発音はまだ不十分でしたが、漢字を読み分けていることだけは、私がこの耳で確認いたしました。